

ミズノ タカコ

氏 名 水野 貴子

学位の種類 博士 (工学)

学位記番号 博第1216号

学位授与の日付 2021年3月31日

学位授与の条件 学位規則第4条第1項該当 課程博士

学位論文題目 近代和風建築早川家住宅に関する研究
(A Study on the modern Japanese-style architecture Hayakawa residence)

論文審査委員 主査 教授 麓 和善
教授 北川 啓介
准教授 夏目 欣昇
教授 村上 心
(梶山女学園大学)

論文内容の要旨

日本では近代化が始まった明治期以降、より活発化した物流や人々の交流を時代背景として、新たに台頭した実業家や文化人などから影響を受けた建築主や大工棟梁が、創造的な意見を交わしながら、住宅を作り上げていた。しかしながら、近年、時代の流れと共に、生活様式や価値観が変化し、建物が老朽化すると、歴史的な和風建築について、十分な理解が行われないまま、取り壊すことが余儀なくされている例が少なくない。また、残された史料に限られるため、後世にその建物の価値が見いだされず、放置される例も少なくなると、古くから存在するものへの理解に努めることが、我々には必要ではないだろうか、日々思うのである。

幸いにして、本研究に取り上げた早川家住宅には、住宅建設当初の史料が豊富に残されているため、その住宅の歴史的価値を振り返る絶好の機会することができる。本研究では岐阜県近代和風住宅早川家住宅の価値を、建物と史料を調査分析し、考察した。史料は主に住宅建築に関する図面類と、当主が関わった文化人とのやりとりをしたための書簡である。それらの考察により、早川家住宅の特質と文化的価値を明らかにした。

第1章「序論」では、近代和風建築早川家住宅の既往研究についてまとめ、本研究の視点と研究方法について述べた。

第2章「早川家住宅の概要」では、その時代背景、地理的特色とともに、早川家と当主早川周造について述べた。さらに、早川家には建築関係の史料が86点存在し、それらを三つの分類に分け、分析した結果、いまだ研究されてこなかった史料が多数あることを明らかにした。

第3章では「早川家住宅の耐震対策」では、「記録帳」にみられる屋敷・敷地内建物の被害と再建の経緯について述べた。そして、「記録帳」の文化的価値を鑑みて、読み下し文を正確に掲載した。この章では、さらに、当主早川周造自身が、現代の建築家に先駆けて、耐震建築を考察した痕跡を明らかにし、早川家住宅が先駆的耐震建築として評価できる特質を考察した。

第4章「平面計画の変遷課程について」では、第2章で述べた史料を基に、主に平面計画について考察をすすめた。濃尾震災後に新設した早川家住宅の建設年代は、大きく二期に分けられる。建設時期を二期に分けた理由は、建物規模によるものか、または、地域的な災害による要因も、当主早川周造自身の業務上の都合など、いくつか要因は考えられる。いずれにせよ、主屋と離れは建設時期を少々ずらして計画されたため、各時期の各室について、図面を比較し、分析した。

早川家に存在した平面図は全部で12枚あり、それらを一枚ずつ比較していくと、計画の時期と検討過程、それらに応じ、いく通りかの案が検討されていたことがわかる。それらの考察により、屋敷の計画の成り立ちと計画の変遷を明らかにした。さらに、それらが検討された時期を分析し、12枚の図面の検討序を明確に見極めることができた。

第5章「書簡にみられる早川家の計画について」では、当主早川周造と当時の文化人、特に茶匠や千家十職の当主などとの交流から、様々な意見交換が行われた状況が読み取れる。そのやりとりをたどると、文化的な面でも建築面でも知識が豊富で、創造性に富んだ意見交換が交わされた様子がうかがえる。建築家という職能が確立する以前に、大邸宅はどのように計画されていたのか、成り立ちがみえてくるのである。これらを基に、明治期に大邸宅の当主はどのように自宅の意匠を決定し、施工に移していったのか、その背景を明らかにした。

第6章「結論」では、各章の分析結果をまとめ、近代和風建築早川家住宅に関する研究の総括とした。

論文審査結果の要旨

日本では近代化が始まった明治期以降、より活発化した物流や人々の交流を時代背景として、新たに台頭した実業家や文化人などから影響を受けた建築主や大工棟梁が、創造的な意見を交わしながら、住宅を作り上げていた。しかしながら、近年、時代の流れと共に、生活様式や価値観が変化し、建物が老朽化すると、歴史的な和風建築について、十分な理解が行われないうまま、取り壊すことが余儀なくされている例が少なくない。本研究では岐阜県近代和風住宅早川家住宅の価値を、建物と史料を調査分析し、考察している。その考察により、その文化的価値を明らかにしている。

第1章「序論」では、近代和風建築早川家住宅の既往研究についてまとめ、本研究の視点と研究方法について述べている。

第2章「早川家住宅の概要」では、その時代背景、地理的特色とともに、早川家と当主早川周造について述べている。さらに、早川家には建築関係の史料が86点存在し、それらを三つの分類に分け、分析した結果、いまだ研究されていなかった史料が多数あることを明らかにしている。

第3章では「早川家住宅の耐震対策」では、「記録帳」にみられる屋敷・敷地内建物の被害と再建の経緯について述べている。さらに、当主早川周造自身が、現代の建築家に先駆けて、耐震建築を考察した痕跡を明らかにし、先駆的耐震建築としての特質を考察している。

第4章「平面計画の変遷課程について」では、濃尾震災後に新設した早川家住宅の建設年代を大きく二期に分け、主屋と離れについて分析している。早川家に存在した平面図は全部で12枚あり、それらを一枚ずつ比較していくと、計画の時期と検討過程、それらに応じ、いくつかの案が検討されていたことがわかる。それらの考察により、屋敷の計画の成り立ちと変遷を明らかにしている。

第5章「書簡にみられる早川家の計画について」では、当主早川周造と当時の文化人、特に茶匠や千家十職の当主などとの交流から、様々な意見交換が行われた状況が読み取れ、建築家という職能が確立する以前に、大邸宅をどのように計画していったのか、その背景を明らかにしている。

第6章「結論」では、各章の分析結果をまとめ、近代和風建築早川家住宅の総括としている。以上は、日本建築史・日本住宅史上の画期的研究であり、建築学上貢献するところ大である。よって本論文を博士(工学)の学位論文として認める。